

## 高校の学習指導と進路指導

佐々木 享

### I

高校教育について各方面からの研究関心が高まっていることは周知のところであるが、民間教育研究運動のなかで高校生の進路指導に関する問題が注目されるようになったのも、最近のひとつの特徴ではないかとおもわれる。たとえば、『日本の民間教育』誌の第16号が「子ども・青年の進路指導と教育」という特集を組んでおり、そのなかで、僅かだが高校の進路指導についてふれたものがある。しかし、とりわけ、民間教育研究運動のなかでは最も多くの高校教師を結集しているといわれる高生研（全国高校生活指導研究協議会）の雑誌『高校生活指導』の第40号が「生活指導と進路問題」という特集をしたのは、その顕著な例といふべきであろう。<sup>1)</sup>同誌の編集後記は、「高生研としては、はじめての進学・就職問題を組みました。私たちとすれば、いささかきばって見たわけです。」とのべている。読者である私もそうおもったが、編集後記は、この「無謀ともいえる」企画には若干の難色を示した人があったこと、そのなかには「この進路問題を実践的な問題として論ずるまでに、私たちの運動が前進しているのかという、時期尚早論もあった」と伝えている。高校における進路指導問題がおかれている状況がかなり正確に反映しているようにおもわれて興味深かったが、同時に、あえて正面から進路指導問題にとり組んだ同誌に敬意を表せずにはいられなかった。

雑誌『教育』の1977年11月増刊号(第351号)が伝えるところでは、77年8月の第16回教科研全国大会の「青年期教育」分科会

でも、高校生の進路指導が重要な話題のひとつになったといわれる。なおこの分科会の討論については、「進路指導は教育活動のひとつの固有の部分であると同時に、教育実践の全体をつらぬく視点でもあることを再確認させた」という刮目すべきまとめが行なわれている。<sup>2)</sup>このまとめには、すなおには同意できない。中学校についてはともかくとして、高校については、進路指導がその教育活動のひとつの固有の部分であるとか、その教育実践の全体をつらぬく視点である、というようなことは、ほんのひと握りの教師が確認したことはあったかもしれないが、圧倒的な高校教師達は、そんなことは考えたこともないのではないだろうか、という疑問があるからである。

民間教育運動の分野ではこれまで高校の進路指導問題がほとんどとり扱われたことがないなどといって、全国進路指導研究会(全進研)のことにふれないのは片手落ちになるので、念のために同会の機関誌『進路指導と高校全入』を調べてみたが、私の気がついた限りでは、高校教師による進路指導に関する論文ないし実践報告は、第6号の浦田広幹「正しい進路指導のために」だけといっても過言ではない状況である。(同会は、機関誌のほかにも多数の書物を出しているが、書物については調べなかった。)こまかくいえば、一度だけ、全進研第13回大会への基調提案に大学入試問題がとりあげられたことがある(第46号、10～13ページ)。これは第13回大会での特別講演であった池上淳「現代資本主義と大学入試制度改革」(第47号所収)と関連するの

かも知れないが、同会の運動のなかでの位置づけははっきりしない。全進研は、その会則にみる限りは高校の進路問題を排除しているとは考えられない。しかし『進路指導と高校全入』という機関誌名は、中学校での進路指導問題に重点をおいていると察せられる。

念のために学校教育法をみると、中学校に関しては、「社会に必要な職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと」(第三十六条二号)がその目標のひとつに、高等学校に関しては、「社会において果さなければならない使命の自覚に基き、固性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な技能に習熟させること」(第四十二条二号)がその目標のひとつに掲げられている。また、中学校、高校の学習指導要領にはいくらか違った書き方ではあるが、それぞれ進路指導を行なうべきことが記されている。学校教育法がこのような目標を掲げたことの意味については、慎重に吟味しなければならぬ問題が多いのだが、ここでは、学校教育法が中学校教育、高等学校教育という中等教育の目標のひとつとして、生徒の進路指導に関する課題を掲げているという事実注目することにどめたい。また、中・高の学習指導要領が進路指導に関して何を記述しているかについては、ここでは立ち入らない。

ここでは、高校教育において、進路指導という問題が、注目すべき課題のひとつとして浮かびあがってきているという事実注目したいのである。

## II

高校では進路指導は行なわれていないから問題が研究されることもないのだなどといったら、もちろんそんなことはないという反論があろう。私も全く行なわれていないなどと考えているわけではない。しかし、大部分の高校では、進路指導というに値するほどの指

導は行なわれていないといっても過言ではないのではないかという疑問は消えない。こういう行き違いが起る理由のひとつは、「進路指導」ということばの意味について一致がないからであろうとおもわれる。高校生にたいする進学指導や就職指導ならば、何も行っていないなどという高校はないであろう。だから、進学指導や就職指導が進路指導だといふのであれば、どこでも行なわれているということになってしまう。しかし、進学指導は進学指導であり、就職指導は就職指導なのであって、それ自身が進路指導であるとはいえないのではないかというのが私の考えであり、疑問である。

進路指導については、もともと長い間職業指導といわれてきたものであって、1958年の中学校学習指導要領の改訂の頃から今日のように変わったという経過もあり、ことばのセンサクをすることにも一定の意義があるのだが、それは別の機会に譲ることにして、ここでは進路指導に関するひとつの事実注目してみたい。

1971年10月に文部省が中・高の進路指導の実態調査を実施したこと、この調査結果がいわゆる多様化路線を軌道修正しはじめる直接の契機となったことは今では周知のことであろう。<sup>3)</sup>この調査報告書のなかで、学校側の行なっている進路指導を生徒達がどううけとっており、生徒達は進路指導に関して(進路指導というかどうかは別として)何を求めているか、という調査項目がふくまれていて、そこには興味深い事実が示されている。

「進路指導に対する生徒の受けとめ方」は、中学生・高校生に等しく次の6項目の調査が行なわれた(52、118ページ)。

- (1) 調査・検査等により自分自身をよく知ることについて
- (2) 進学や就職についての考え方について
- (3) 職業・産業の種類や内容について
- (4) 上級学校の種類や内容について

(5) 進路についての個別相談

(6) 職業観や労働に対する考え方について  
この調査項目のうち、(1)～(5)は、伝統的に「職業指導」「進路指導」の主要な内容とされてきたもので、ひと口でいえば、生徒を進路に適応し順応させるための指導という特色をもっている。これに対する中学生の回答は、「じゅうぶん受けた」とする者、「ある程度受けた」とするものを合わせると、(3)が48%であるのを除くと、すべて50%を越えている。最も多いのは(2)で、「じゅうぶん受けた」とする者13%、「ある程度受けた」とする者60%、計74%である。近年進学率の高さからみて問題となるであろうとおもわれる(4)についても、「じゅうぶん受けた」とする者15%、「ある程度受けた」とする者55%、計70%である。

高校生の回答は、普通科、農業科、工業科、商業科、家庭科に分けて調査されている。高校生は、調査されたすべての学科とも、(1)～(5)のすべての調査項目につき、「じゅうぶん受けた」とする者、「ある程度受けた」とする者を合わせても、50%に達しない。高校では、伝統的な意味における「進路指導」ですら、ほとんどすべての項目について「あまり指導を受けなかった」とする生徒が、ほとんどすべての学科にわたっているのである(商業科の生徒だけが、(2)につき「あまり受けなかった」とする者が42%)。生徒を進路に適応させ順応させるという名目で選別し手をかすくらいなら「進路指導」などやらないほうがまだという意見もあるかもしれないが、事柄はそれ程単純ではない。(6)職業観や労働に対する考え方について、「あまり指導を受けなかった」とする者が、中学校66%、高校59～80%と非常に高いからである。この調査に関してだけ細目を示すと、「じゅうぶん受けた」とする者は、中学4%、高校普2%、農5%、工7%、商6%、家庭3%、「ある程度受けた」とする者、中学30%、高校普17

%、農26%、工33%、商31%、家23%である。論者はあるいは「どのような職業観、労働観かが問題だ」というかもしれないが、この調査結果は、どのような職業観であれ労働観であれ、指導がなされていないことを示しているのである。

もう1つだけ例をあげてみる。宮内博が愛知県下の高校生について進路指導の実態を調査しているが、<sup>4)</sup>これによると、「自己理解指導をうけたことがある」とする者は、普通高校30.7%、職業高校25.8%、「職業の内容・見通しについて教えてもらった」とする者は、普通高校19.7%、職業高校49.2%、「職業人としての心構えについて話し合ったことがある」とする者は普通高校0.9%、職業高校8.7%となっている。宮内の調査項目のほろがいわゆる伝統的な「職業指導」「進路指導」に傾斜しているとみられるが、高校の進路指導の状況の一端をみる資料としては、一定の意味があるようにおもわれる。

### Ⅲ

いうまでもなく、上にみたのはごく限られた統計的調査であって、個々の学校、個々の教師の実践の実態を示したものではない。しかし、この限られた資料だけでも、私たちは、進路指導をめぐる学校教育の若干の課題について指摘することは可能ではないかとおもうのである。

高校生の不安や悩みが、「将来の進路」、「授業や勉強」の問題に集中していることはよく知られているところである(たとえば『進路指導の現状と問題』78ページ参照)。高校も大学も、青年のもっている可能性を伸ばす場としてではなく、青年を差別し選別する場になっていることを、青年たちが感じとりながら、それに負けまいとするところに不安や悩みが生れるようにおもわれるのである。ところが、現実の高校は(高校の教師は、といった方が正確かもしれない)、生徒達を、生徒達が十数年の間に背負わされてきた「学

力」だけで仕分けしてみつめるように仕向けられてきている。こういう眼で生徒をみる限り、生徒達の悩みや不安にまで手は届かないのではないかとおもわれるのである。

高校生は、「学力」の高い者も極端に低いといわれる者も、それぞれ自分の生き方を探そうとしている。彼らが求めているのは、自己理解の深化、進学・就職情報の提供、進学・就職の相談等々の伝統的な「職業指導」「進路指導」などではないのではないかと。高等学校を出たら、さらに学び、あるいは働くことになるであろう自分の生き方に、自分なりの自信を持ちたいのではないだろうか。この点で、「職業観や労働に対する考え方について」70%、80%もの高校生が何ら指導を受けたことがないとしていることは、大いに気にかかるのである。

洋の東西を問わず、中等教育というものは、伝統的には、上級学校進学にのみ関心をしめし、職業に対する関心の欠如するをもってその特色とするといわれてきた。<sup>5)</sup>戦後の高校教育は、新しい、国民の希望する誰もが進学できる学校教育となったのだし、進学率に関する限りは事実そうになっているのに、職業生活への関心の欠如、ないしは青年の生き方に対する関心の稀薄さは、進路指導面での中学校との著しい差異に如実に現われている。圧倒的に多くの者が卒業後すぐに就職するであろう職業科においてさえそうである。

現代社会において、青年が勉強することの意義、働くことの意義を一義的にみ定めることはたんに限界があるというだけでなく、むしろ著しい困難なことである。それは、「学力」があっても低くてもそうである。誰もがかかえるその困難のなかで、学び、働き、生きてゆくということを、高校教育では指導しな

くてはいけないのではないかと。進路指導という問題を、そういう課題として位置づけてみたいのである。また、そういう意味での関心が高校教師のあいだに、僅かずつにせよ拡がりつつある<sup>6)</sup>ことは重要なことである。

- 1) 『高校生活指導』第40号、1977年11月、には、花香実「進路問題をどうとらえるか」、竹内常一「生活指導と進路選択の問題」、山本洋幸「進路指導と集団づくり」の3論文のほか、水野浩「進路を考える手がかりを求めて」、諏訪哲二「HR集団を解体させない進路指導を模索して」、石川光顕「自分の生活をみつめ合うHR集団づくりを通して」、加美越生「受験体制下の生徒たち」の4つの実践記録が収められている。念のためにいえば、小島昌夫「国大協一次入試と高校教育」は「時評」であって特集とは別扱いのようである。
- 2) 乾彰夫・太田政男「高校教育実践の課題と視点」『教育』第351号、1977年11月増刊、112～118ページ。
- 3) 文部省初等中等教育局『進路指導の現状と問題』1973年3月、帝国地方行政学会刊。
- 4) 宮内博「高校進路指導の現状と改善方向」、『日本教育学会第35回大会発表要旨集録』1976年、139ページ。
- 5) エミール・デュルケーム、小関藤一郎訳『フランス教育思想史』下 1966年、普遍社、281ページ。
- 6) 前掲の『生活指導』誌のほか、雑誌『教育』77年1月号から10回にわたって連載した「現代の高校生」という実践記録にも、学ぶべきものが多い。

(名古屋大学)